

〈解答〉

- ① 1 石高（漢字2字指定）
2 イ
3 院政
4 ア
5 ①：キリスト教徒 ②：絵踏
6 エ
7 ウ
8 B→D→A→C（完答）

配点 ①8は2点，他は各1点 10点満点

〈解説〉

- ① 1 一石を重さにすると米約150kgである。田だけでなく畑や屋敷も米の石高で表され、年貢が課された。
- 2 太閤検地の結果、検地帳に記された農民は、その田畑を耕作する権利を認められた代わりに、定められた年貢を村ごとに領主である武士に納めることになった。武士は、その領地を石高で表され、石高に応じて軍役を負担することになった。こうして、公家や寺社は、それまで荘園領主として持っていた田畑に関する権利をすべて否定され、勢力を失った。
- 3 院政とは、天皇が位を退き、上皇として政治を行うことで、1086年、白河天皇が上皇になって始めた。制約の多い天皇と異なり、上皇は自由な立場だったので、院政では先例にとらわれない政治が行われた。
- 4 太政大臣は律令官制の最高責任者である。平清盛は、後白河上皇による院政を助け、太政大臣となって一族を朝廷の高い役職や国司につけた。さらに藤原氏と同じように娘を天皇のきさきとし、生まれた子を天皇に立てた。こうして平清盛は、武士として初めて政権を手に入れた。
- 5 1637年、島原（長崎県）と天草（熊本県）のキリスト教徒の百姓など約37000人が、無理な年貢の取り立てと、キリスト教に対する厳しい取り締まりに反対して一揆をおこし、島原半島南部の原城跡に立てこもった。幕府は、約12万人の大軍を送り、ようやく一揆をおさえた。これを島原・天草一揆という。その後、幕府は、キリスト教の禁止をいっそう強めた。
- 6 豊臣秀吉の朝鮮侵略から後、朝鮮との国交は断絶していたが、対馬藩の仲立ちによって、徳川家康のときに国交が回復した。その後、将軍が代わるごとに、朝鮮からは朝鮮通信使と呼ばれる使節が江戸を訪れるようになった。また、対馬藩は、幕府の許可のもと毎年釜山に船を送って、朝鮮との貿易を行い、朝鮮からは生糸や木綿、朝鮮人参を輸入し、日本からは銀や銅などを輸出した。
- 7 守護大名とは、室町時代に、一国を領地として支配した武士である。鎌倉時代の

守護は、幕府から任命された地方の役人にすぎなかったが、南北朝の内乱のころから守護が荘園もおさめるようになり、地頭やその土地に住む武士たちを従えるようになった。アの外様大名は、関ヶ原の戦い以後に徳川氏に従った大名、イの譜代大名は、関ヶ原の戦いより前から徳川氏に従っていた大名、エの地頭は、1185年に源頼朝が諸国の荘園や公領におき、年貢を集めたり、土地を管理した職である。

- 8 Bは平安時代末期、Dは室町時代後期、Aは安土桃山時代、Cは江戸時代初期である。